帝塚山大学心理科学論集 2018年 第1号 pp.27-32

資料論文

学校支援ボランティア参加者と不参加者の違い

中地 展生・水野 邦夫

問題

文部科学省(2017)によれば，2015年度の不登校児童生徒数は，約12万6,000人であり，その数は依然として多く，前回の調査に比べて増加していることがわかった。文部科学省では，その対策としてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの導入，教育支援センターの活用などの施策を実施しているが，実際に児童生徒が不登校状態になってからの支援というのは困難であることが多い。学校現場においては，不登校となる可能性のある児童生徒をどのように支援していくのかが大きな課題といえる。不登校をはじめ，複雑化する子どもたちの問題に対応していくためには，教師や心の専門家だけでなく地域の力を活用した，複数の視点からの支援が必要であろう。そのような支援の一つとして，地域における大学生による学校現場での「学校支援ボランティア」が挙げられる(本論文では，学校支援に関わる大学生ボランティアを「学校支援ボランティア」とする)。このような学校支援ボランティアへの学校現場でのニーズは高く，神澤・佐脇・大畑(2008)のI市の小学校教員127名を対象とした調査では，74%の教員が学校支援ボランティアが必要であると回答している。

ボランティアを行っている大学生やそれを支援する大学側に対しては，次のような全国的な調査が実施されている。日本学生支援機構(2006)の調査結果では，ボランティアを行った学生のうち，「満足している」という学生が65%であり，その理由として，「楽しかった」「ものの見方，考え方が広がった」「友人や知人を得ることができた」を挙げていることがわかった。その後の調査(日本学生支援機構，2009)では，84.1%の私立大学等，76.7%の国公立大学等において，学内にボランティア・NPOに関する部署が整備されていることがわかっている。近年，大学が地域で果たす役割は多様化しており，このような大学生による学校支援ボランティアについては，それぞれの大学が特色を活かして取り組むべき課題といえる。

不登校支援を行う大学生ボランティアを対象とした研究も報告されている。松本・杉本・隈元(2008)は，教員養成系の大学で取り組まれている“不登校支援ネットワーク(NANAっくす)”について，そこでボランティア活動を行っている学生とそうでない学生とを比較している。その結果，ボランティアを行っている学生は，“自分たちの役割を把握し，子どもたちがより楽しく過ごせるように考えて活動する傾向が高い”と述べている。また，黒沢・日高・張替・田島(2008)では，心理学を専攻する大学生をボランティアとして小中学校へ派遣する“メンタルサポート・ボランティア活動”に参加した学生の感想などをKJ法によって分析している。その結果，“自他の理解能力”や“コミュニケーション能力”などの成長が見られたことを指摘している。これらの研究からも，大学生にとって，ボランティア活動を行うことは，自分自身にとっても成長の機会となることは明らかである。しかし，実際には，ボランティアに積極的に参加する学生ばかりでなく，ボランティアを敬遠したり，参加をためらったりする学生も多く存在しているのも事実である。

今回，筆者らは大学とA 県教育委員会が連携して小学校を対象として，不登校の未然防止・早期対応を目的としたボランティア活動を支援する体制づくりを進めることになった。ボランティアの内容としては，子どもと年齢が近い大学生が，クラスになじめないなどの不登校傾向のある子どもの話し相手をしたり，別室での学習や活動の補助を行うというものである。この取り組みのために，A県教育委員会にはマッチングコーディネーターが1名配置され，小学校と大学生側の希望や派遣条件のマッチングを行うことが可能となった。また，年に2回，学校支援ボランティア活動に詳しい臨床心理士を講師として招き，ボランティアを希望する学生に対して配置研修会，継続研修会を開催した。

本研究では，この取り組みを機に，ボランティアに参加した学生と参加しなかった学生に対して，次の①～④の側面に特に違いが見られることを想定して，質問紙調査を実施した。使用した尺度とともに以下にそれぞれの内容を示す。①「ボランティアに対する思い」(松本他，2008)：学生がボランティア活動にどのような態度や思いで参加しているのかを測定する。②「ボランティア活動継続動機」(妹尾・高木，2003)：ボランティアを続ける理由や動機を測定する。③「対人恐怖心性尺度」(堀井・小川，1997)：社会的場面や集団場面での不安や悩みの程度を測定する。④「自尊感情尺度」(山本・松井・山成，1982)：自分自身の価値を認め，どれぐらい自分を尊敬できているかを測定する。

なお，質問紙の実施時期は，多くの学生がまだボランティアに参加していない5月時点(配置研修会の時期)と，ある程度の学生がボランティアに参加していると考えられる10月時点(継続研修会の時期)に行った。各時期の分析だけでなく，5月から10月の間にボランティアを始めた学生と両時期ともに不参加であった学生の違いについても比較検証し，大学が学校支援ボランティアへの参加を学生に促すための工夫についても併せて論考したい。

方法

調査対象者

調査対象者は，近畿圏のB大学心理学部に在籍する大学生である。1回目の調査は，2016年5月下旬から6月中旬に実施し，2回目の調査は，同年10月下旬～11月上旬に実施した。実際に分析に使用したのは，1回目の調査で有効回答があった115名（男41名，女74名），2回目の調査で有効回答があった117名（男48名，女69名）である。なお，この調査時点に関わらずボランティア活動をすでに行っている学生も見られていた。

また，学校支援ボランティア活動に1回目も2回目も不参加であった学生を「継続不参加」群，1回目から2回目の調査の間に学校支援ボランティア活動を始めた学生を「ボランティア開始」群とした。内訳などその詳細については，結果の該当カ所に後述する。

実施方法

本研究で用いた尺度は以下の4つである。

①ボランティアに対する思い：松本他（2008）が作成した尺度で，「ボランティアの役割」（具体的項目：『偏見を持たず子どもと接する』など），「子どもへの関わり」（同：『先生やスタッフと子どもの間の中立的な立場になる』など），「ボランティアの適性」（同：『子どもから学ぶ』など）の3つの下位尺度から構成されている。6件法（「全くそうでない」～「いつもそうだ」）で回答を求める。合計34項目であるが，今回は各5項目ずつ合計15項目を一部修正して使用した。

②ボランティア活動継続動機：妹尾・高木（2003）が作成した尺度であり，「自己志向的動機」（具体的項目：『自分の持っている知識，技術を使う練習になる』など），「他者志向的動機」（同：『人に喜んでもらえる』など），「活動志向的動機」（同：『他のボランティアと楽しく活動できる』など）の3つの下位尺度から構成されている。5件法（「あてはまらない」～「あてはまる」）で回答を求める。合計16項目であるが，今回は，各3項目ずつ合計9項目を使用した。

③対人恐怖心性尺度：堀井・小川（1997）が作成した尺度であり，6つの下位尺度，合計30項目から構成されている。7件法（「全然あてはまらない」～「非常にあてはまる」）で回答を求める。今回は「集団に溶け込めない悩み」5項目（具体的項目：『グループでのつき合いが苦手である』など）と「社会的場面で当惑する悩み」5項目（同：『人前に出るとオドオドしてしまう』など）の合計10項目を使用した。なお，質問紙調査終了後に1項目の表示に不備があることがわかり，当該項目（6番目の項目）を分析から外し，合計9項目を分析対象とした。

④自尊感情尺度：山本他（1982）が作成した尺度であり，10項目（具体的項目：『少なくとも人並みには，価値のある人間である』など）から構成される。5件法（「あてはまらない」～「あてはまる」）で回答を求める。

なお，尺度①と②は，調査時点でボランティア活動をしていない学生については，ボランティア活動をしていると想定をして回答を求めた。

調査手続き

B大学で行われたA県教育委員会との合同の学校支援ボランティア研修会時（5月，10月）や同時期にあったB大学での講義やゼミなどで質問紙を配布し回答を求めた。

倫理的配慮については，データは学術目的のみに使用することや，鍵のかかる研究室で保管をすること，一定の期間後にはシュレッダーにかけることなどを説明した。また，調査協力は本人の意思によるものであり，途中で回答をやめることも可能であること，回答しなかったとしても不利益になることはないなども併せて伝えた。

結果

調査結果概要：1回目

回答者を学年別で見ると，1年生14名，2年生50名，3年生41名，4年生10名であった。このうち学校支援ボランティアを経験しているのは，5名（全員2年生；男子4名，女子1名）であり，平均経験年数は5.65ヶ月（SD＝6.73）であった。この5名を参加群，残りの110名を不参加群とした。

両群の各尺度の平均値を比較するために，対応のない t 検定を行った。その結果，「対人恐怖心性」得点と「自尊感情」得点に有意な差が見られ，「対人恐怖心性」得点では，参加群のほうが有意に低く（$t(113)=2.45$, $p<.05$），「自尊感情」得点では，参加群のほうが有意に高かった（$t(113)=2.06$, $p<.05$）。なお，「ボランティアに対する思い」得点，及び「ボランティア活動継続動機」得点については，有意な差は確認できなかった。以上の結果を，Table 1に示す。

Table 1　1回目の参加群と不参加群の各尺度得点の比較

尺度名	Range	参加群	不参加群	t値(df)
		平均値（SD）	平均値（SD）	
ボランティアに対する思い	1-6	4.80(0.32)	4.41(0.59)	1.47 (113) *n.s.*
ボランティア活動継続動機	1-5	4.29(0.26)	3.95(0.55)	1.35 (113) *n.s.*
対人恐怖心性	0-6	1.56(0.95)	3.19(1.48)	2.45 (113) *
自尊感情	1-5	3.66(0.51)	2.94(0.78)	2.06 (113) *

註）参加群（N=5），不参加群（N=110），＊ p<.05

調査結果概要：2回目

回答者を学年別で見ると，1年生5名，2年生43名，3年生57名，4年生12名であった。このうち，学校支援ボランティアを経験しているのは，16名（1年生3名，2年生6名，3年生4名，4年生3名）であり，平均経験年数は7.38ヶ月（SD＝8.96）であった。16名の性別は，1年生3名は全員女子，2年生6名は，5名が男子，1名が女子，3年生4名は，2名が男子，2名が女子，4年生の3名は全員女子であった。この16名を参加群，残りの101名を不参加群とした。

両群の各尺度の平均値を比較するために，対応のない t 検定を行った。その結果，「ボランティアへの思い」得

点にのみ有意な差が見られ，参加群のほうが高かった（$t(115)=2.13$, $p<.05$）。その他の得点については，有意な差は確認できなかった。以上の結果を，Table 2に示す。

Table 2　2回目の参加群と不参加群の各尺度得点の比較

尺度名	Range	参加群 平均値（*SD*）	不参加群 平均値（*SD*）	*t*値（*df*）
ボランティアに対する思い	1-6	4.59(0.48)	4.22(0.66)	2.13 (115) *
ボランティア活動継続動機	1-5	4.04(0.59)	3.84(0.56)	1.33 (115) *n.s.*
対人恐怖心性	0-6	2.66(1.58)	3.32(1.54)	1.59 (115) *n.s.*
自尊感情	1-5	3.16(0.90)	2.88(0.80)	1.30 (115) *n.s.*

註）参加群（*N*=16），不参加群（*N*=101），* $p<.05$

継続不参加群とボランティア開始群の1回目と2回目の比較

1回目，2回目ともに回答のあった学生のデータから，次のように群分けをして分析を行った。学校支援ボランティア活動に1回目も2回目も不参加であった学生を「継続不参加」群（49名），1回目から2回目の調査の間に学校支援ボランティア活動を始めた学生を「ボランティア開始」群（8名）とした。なお，8名の内訳は，1年生女子が2名，2年生が2名（男女1名ずつ），3年生が3名（男子1名，女子2名），4年生女子が1名であった。平均経験年数は3.00ヶ月（$SD=1.60$）であった。継続不参加群の1回目と2回目の各尺度の平均値の比較をするために，対応のある *t* 検定を行った。その結果，「ボランティアに対する思い」得点が1回目よりも2回目のほうが有意に低かった（$t(48)=2.56$, $p<.05$）。また，「自尊感情」得点も，1回目よりも2回目のほうが低い傾向にあった（$t(48)=1.92$, $p<.10$）。「ボランティア活動継続動機」得点及び「対人恐怖心性」得点は，1回目と2回目とに有意な差は確認されなかった。以上の結果をTable 3に示す。

次に，ボランティア開始群の1回目と2回目の各尺度の平均値を比較するために，同様の分析を行った。その結果，「ボランティアに対する思い」得点，「ボランティア活動継続動機」得点，「対人恐怖心性」得点，「自尊感情」得点のすべてにおいて，有意な差は見られなかった（Table 4）。

Table 3　継続不参加群の各尺度得点の1回目と2回目の比較

尺度名	Range	1回目 平均値（*SD*）	2回目 平均値（*SD*）	*t*値（*df*）
ボランティアに対する思い	1-6	4.30(0.60)	4.10(0.62)	2.56 (48) *
ボランティア活動継続動機	1-5	3.87(0.55)	3.76(0.46)	1.68 (48) *n.s.*
対人恐怖心性	0-6	3.50(1.47)	3.39(1.43)	0.95 (48) *n.s.*
自尊感情	1-5	3.00(0.77)	2.86(0.79)	1.92 (48) †

註）*N*=49，* $p<.05$，† $p<.10$

Table 4　ボランティア開始群の各尺度得点の1回目と2回目の比較

尺度名	Range	1回目 平均値（*SD*）	2回目 平均値（*SD*）	*t*値（*df*）
ボランティアに対する思い	1-6	4.53(0.53)	4.45(0.49)	0.45 (7) *n.s.*
ボランティア活動継続動機	1-5	3.89(0.62)	3.67(0.58)	1.32 (7) *n.s.*
対人恐怖心性	0-6	2.58(1.61)	2.72(1.60)	0.90 (7) *n.s.*
自尊感情	1-5	3.35(0.71)	3.39(0.64)	0.21 (7) *n.s.*

註）*N*=8

考察

各時期の参加群と不参加群の比較から

1回目の調査の時点ですでに5名が学校支援ボランティアを開始していた。この5名は大学と教育委員会との連携が始まる前から，自発的にボランティア活動に参加していた熱心な学生といえる。この時期にボランティアを行っていた学生はそうでない学生よりも「対人恐怖心性」が低く，「自尊感情」が高いということがわかった。対人恐怖心性のなかでも今回は，「集団に溶け込めない悩み」と「社会的場面で当惑する悩み」という点を訊ねている。やはり積極的に自らボランティアを志向する学生は，集団や社会に馴染む自信やスキルがある程度あり，自分自身に価値を見出し，自尊感情も高いという特徴があることがわかった。また，「ボランティアに対する思い」と「ボランティア活動継続動機」には，両群の間で有意差が見られていない。不参加群におけるこの二つの尺度得点については，ボランティア活動を想定している前提での回答であり，その解釈は慎重に行う必要があるが，次のようなことが要因として想定される。一つは，この調査時点では，潜在的にはボランティアに対する思いを持ちながらも，まだ大学と教育委員会との調整がつかずに，派遣が実現されていない学生が一定数いることである。また，調査時期が前期中ということもあり，ボランティアを含めてさまざまなことに挑戦する気持ちが不参加群にも保たれていることなども理由として考えられる。

2回目の調査では，ボランティアに参加している学生の数が16名と増加した。特に女子の数は，1回目は1名だったのが2回目は9名と増加していた。2回目で参加群と不参加群の間に有意差が見られたのは「ボランティアに対する思い」のみであった。これは，やはり1回目の時点ではまだ未参加だった学生が，実際にボランティアに行き始めたことが影響していると推測される。「ボランティアに対する思い」尺度の項目には，「偏見を持たず子どもと接する」や「専門的知識（心理学など）を応用した活動をする」などの項目が含まれている。実際にボランティアを体験し，子どもたちと接することが多い群のほうが，当然このような項目の得点が高くなると考えられる。

一方，1回目の調査では両群に有意差が見られていた「対人恐怖心性」と「自尊感情」は，2回目の調査では，有意差が見られなかった。このことは，5月から10月にかけて参加した学生が多く含まれる参加群の特徴が反映されたことが一因であろう。2回目の調査までにボランティアに参加した学生の多くが，これらの側面については，1回目の時点ですでにボランティアを行っていた学生の域にはまだ達していないためと考えられる。

継続不参加群とボランティア開始群の特徴

1回目と2回目ともに回答があった学生を対象とした分析から，継続不参加群では，1回目に比べて2回目には，「ボランティアに対する思い」と「自尊感情」が低下していることがわかった。その一方で，ボランティア開始群では，1回目と2回目で各尺度得点に明確な変化はなく，ある程度の高さで維持されていた。継続不参加群で，ボランティアに対する思いが低下するのは，先ほども理由として挙げたような，ボランティア体験を実際に行っているかどうかの要因が大きいと考えられる。また，夏休みを挟み，後期となり，大学生活においてボランティア以外にも興味関心が移ったためとも推察される。

さらに，大学による学校支援ボランティアのサポートや学生たちにボランティアへの参加を促すシステムを考える上で，継続不参加群のみが「自尊感情」が低下している点に注目したい。「自尊感情」尺度の項目には「何かにつけて，自分は役に立たない人間だと思う」（逆転項目）などがある。このような傾向が強い学生が他者の支援，しかもボランティアのような自発的な支援に参加することをためらうことは想像に難くない。豊田・松本（2004）では，本研究の2回目の調査と同じ10月に，大学生の自尊感情と関連する要因を調査している。その結果，単なる友人関係の多さではなく，「友人から信頼されている方だ」「何でも相談できる友人がいる」「大学生活で充実感を覚えることがある」という項目に自尊感情と正の相関が見られていた。つまり，後期のこの時点で，安定した友人関係を持てないことや，充実した大学生活を送れていないことが自尊感情にも影響し，その結果，ボランティアへの参加につながらないという可能性が指摘できる。今回は，インタビュー調査などによる質的な検討までは行っていないが，ボランティア開始群では，新しいことに挑戦したことで，学校現場から肯定的なフィードバックが得られて，それが自尊感情の維持に貢献していると考えられる。

このような結果を踏まえると，大学が学校ボランティアへの参加を学生に促すにあたっては，「ボランティア活動は素晴らしい」や「子どもを支援することで自身も成長しましょう」と呼びかけるだけでは不十分といえよう。具体的な方策としては，二つの方向のアプローチが考えられる。一つは，大学のカウンセリング関連の体験を重視する授業において，学生自身の自尊感情自体を高めるような経験を積ませることである。また，5月に行う配置研修とは別に，ボランティア活動に興味を持つ学生に対して，そのような自尊感情を向上させるようなプログラム（たとえば，構成的グループエンカウンターなど）を導入することも可能であろう。

もう一つは，自尊感情が低い学生であっても，安心してボランティアに参加でき，継続することができる仕組みをつくることである。たとえば，黒沢・日髙（2009）では，ボランティアを希望する大学生へのボランティア教育や支援体制として，“「活動ガイドライン」および「学校用活用案内」”を作成し，さらに，“定例グループ・スーパービジョンと学生相互支援体制”を整備している。特に，後者については，ボランティアに登録した学生に，定期的にスーパービジョンを提供するために，グループ・スーパービジョンを必修授業としてカリキュラムに取り入れるなどの工夫も行っている。このような活動の目的や具体的な留意点などをまとめたガイドラインを各大学や地域の実状に応じて作成し，グループ・スーパービジョンによる支援体制などの仕組をつくっていくことが必要である。

本研究の限界と今後の課題

今回の研究では，調査対象者が，心理学部の学生のみと限定的なものであった。また，性差についての検討も十分にできていない。全国的な傾向として，心理学部は比較的女子の割合が高い学部である。ボランティアを開始した1回目の時点では，積極的な男子が多かったが，2回目の調査までに参加を開始した女子も多く見られた。このような性差にも着目しながら，心理学部という特色を持つ学部で，このようなボランティアを効果的に支援していく体制について検討していきたい。

A県教育委員会との連携は始まったばかりであり，研究面だけでなく，学生への実践的な教育の機会を担保するという意味でも参加群を増やすことが大きな課題である。実際には，本年度よりマッチングコーディネーターが配置され，大学と教育委員会，あるいは小学校現場との連携が，以前に比べるとスムーズに行われるようになった。しかし，より効果的な連携を行うためにも，大学生の特性などと教育委員会との取り組みと関連した検討がさらに必要になるだろう。今後は，実際に行ったボランティア活動の内容や研修会への参加と各尺度との関連についての検証，学生や受け入れ先の学校関係者などへのインタビュー調査を用いた質的な分析なども視野に入れて研究を進めていきたい。

付記

本研究は，平成28年度に川崎歩氏が帝塚山大学に提出した卒業論文のデータを再分析したものである。データの使用及び発表の許可を頂き感謝いたします。なお，本研究の一部を日本カウンセリング学会第50回大会において発表した。

引用文献

堀井 俊章・小川 捷之（1997）. 対人恐怖心性尺度の作成（続報） 上智大学心理学年報, *21*, 43-51.

神澤 創・佐脇 亜依・大畑 豊（2008）. 学生サポーター派遣事業に関する研究(1)－サポート・ニーズ調査と事前教育に関して－ 帝塚山大学心理福祉学部紀要, *4*, 17-30.

黒沢 幸子・日髙 潤子・張替 祐子・田島 佐登史（2008）. 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長―その様相とキャリア教育の視点からの考察－ 目白大学心理

学研究, *4*, 11-23.
黒沢 幸子・日髙 潤子（2009）. 臨床心理的地域援助としての学校支援学生ボランティア派遣活動のシステム構築 心理臨床学研究, *27*, 534-545.
松本 剛・杉本 愛奈・隈元 みちる（2008）. 不登校支援における学生ボランティアの意識調査－NANAっくす活動を通して－ 兵庫教育大学研究紀要, *33*, 63-71.
文部科学省（2017）. 平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（確定値）
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/__icsFiles/afieldfile/2017/02/28/1382696_002_1.pdf
（2017/10/7）
日本学生支援機構（2006）. 学生ボランティア活動に関する調査報告書
http://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/volunteer/__icsFiles/afieldfile/2015/10/09/houkoku_02.pdf
（2017/10/7）
日本学生支援機構（2009）. 平成20年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書
http://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/volunteer/2008.html （2017/10/7）
妹尾 香織・高木 修（2003）. 援助行動経験が援助者自身に与える効果－地域で活動するボランティアに見られる援助成果－ 社会心理学研究, *18*, 106-118.
豊田 加奈子・松本 恒之（2004）. 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究所紀要, *1*, 38-54.
山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, *30*, 64-68.

Differences between school support volunteers and non-volunteers

Nobuo NAKAJI and Kunio MIDZUNO

Abstract

The purpose of this study was to compare the attitudes of school support volunteers with non-volunteers. The study consisted of two questionnaires given to psychology students in the university twice during the academic year. Time 1 (T1) was late May to mid-June; Time 2 (T2) was late October to early November. Both questionnaires measured four aspects; thoughts on volunteers, motivation to continue volunteer work, anthrophobic tendencies, and self-esteem. Five school support volunteers and 110 non-volunteers responded to the T1 questionnaire; 16 volunteers and 101 non-volunteers responded to the T2 questionnaire. In T1, volunteers had lower anthrophobic tendencies and higher self-esteem than non-volunteers; in T2, volunteers had higher thoughts on volunteers than non-volunteers. In addition, the 49 students who were not volunteers at either T1 or T2 were designated as "continuous non-volunteers," and the 8 who were non-volunteers at T1 but had become volunteers by T2 were categorized as "volunteer started". The average value of each aspect was compared between the two groups. The result showed that the "continuous non-volunteers" group's thoughts on volunteers and self-esteem declined between T1 and T2, whereas the "volunteer started" group did not change significantly.

These results suggest that the system to promote participation in school support volunteers at the university is important not only to encourage positive awareness of students' thoughts on volunteers but also to make efforts to improve their self-esteem.

Keywords: school support volunteers, university students, self-esteem